

問題の所在

これまでの自らの生活科の実践において、身近な人々とかかわる機会をできるだけ取り入れるようにしてきた。しかしながら、その取り組みにおいて、児童は楽しんではいたが、その場限りの活動で終わり、さらに身近な人々とのかかわりを深め広げようとする様子は見られなかった。それは、教師が児童にとっての人とのかかわりの意義や人とのかかわりを深め広げていく過程をよく理解しておらず、適切な指導ができていなかったためと思われる。

そこで、本研究では、生活科において、児童に身近な人々とのかかわりを深め広げようとする意欲を育てるために、どのような支援をすればよいかについて探ることにした。

研究の方法

身近な人々とかかわることの意義やかかわりが深まり広がっていく過程に関する文献研究などの理論研究をもとにして、授業実践を行い、児童の身近な人々とかかわろうとする意欲の変容について分析・考察を行う。

研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 身近な人々とかかわることの意義

本研究において、人とかかわるとは、「相手に関心をもち、適切に自分を表現したり、相手の思いを受け止めたりしながら、共に活動することで、心のつながりをつくること」ととらえる。

児童にとって、身近な人々とかかわる意義とは、

人とかかわることで、自分のものの見方や考え方を広げ、生活をより豊かにすることができることにありと考える。また、児童は、多様な人々とかかわる体験を通して、人の優しさや温かさに触れたり、他者や自分のよさに気づき、意欲や自信をもったりすることができると思われる。

(2) 身近な人々とのかかわりが深まり広がる過程

図1に人とのかかわりが深まり広がる過程のモデルを示した。

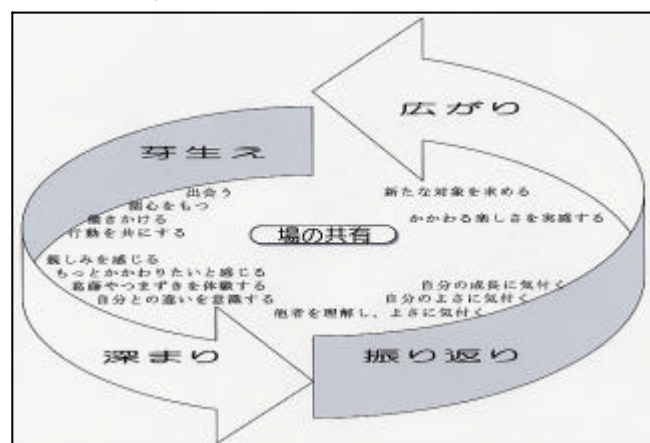


図1 かがわりが深まり広がる過程のモデル

かがわりはまず、場を共有することから始まると考える。児童は他者とかかわり、行動を共にすることで、相手に親しみを感ずり、もっとかかわりたいという意欲を高めるとされる。さらに繰り返し場を共有することで、楽しさ、葛藤、つまづきなどいろいろな思いを味わいながら、かかわり方を学ぶ。自分のかかわりを振り返りながら、自分や他者に気づき、理解するようになると思われる。また、児童が人とかかわる楽しさを実感したとき、違う人ともかかわりたいという思いをもつようになると思われる。

身近な人々とのかかわりが深まるとは、児童が仲良くなったと感じ、さらにもっと一緒に活動をしたと思うこと、かがわりが広がるとは新たな対象に

かかわろうとすることとらえることができる。

その活動をすすめる原動力となるのは、かかわりを深め広げようとする児童の意欲であり、それは自ら働きかける姿として、児童の行動からとらえることができると思う。

児童の意欲を育てるためには、繰り返しかかわる場を設定し、しっかりとかかわる体験を積み重ねると同時に、自分の活動を振り返って課題を意識したり、その解決方法を考えたりすることが大切であると思われる。

2 実践授業の計画

基礎的研究を踏まえて、広島市立A小学校1年B組34名を対象として、表1に示すような地域の高齢者10名とC保育所D組5歳児21名(以下園児と記す)との交流を位置付けた学習指導計画を作成した(細案は紙幅の都合により省略)。

(1) 単元名

「わくわくふゆのなかよし大きくせん」

(2) ねらい

遊びを中心に高齢者、幼児とかかわることを通して、身近な人々とかかわるよさを味わうことができる。
季節の変化に気付き、寒い冬も元気に遊ぶことができる。
冬の遊びや伝承されてきた遊びを知り、自分の生活をより楽しくすることができる。

(3) 学習指導計画作成に当たって留意したこと

地域の高齢者、園児とかかわる場を設定し、多様な人とかかわりをもつことができる活動にした。
(a) かかわりを深めるために繰り返しかかわる場を設定した。(b)
児童が自分の課題を意識し、解決方法を考えることができるような場を設定した。(c)
図2のような4種類の振り返りカードを作成し、児童が活動を振り返り、自分の思いや願いを出しやすいようにした。(d)

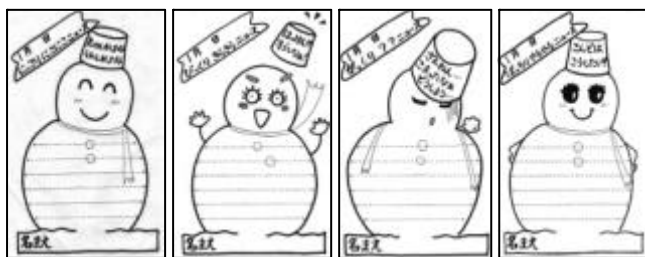


図2 振り返りカード「ゆっくんニュース」

表1 学習指導計画(全16時間)

次	時	主な活動	児童の意識	支援
第一 次	第1時	・今までやったことのある冬の遊びについて発表し、遊ぶ。	・一緒に遊ぶと楽しいな。 ・違う遊びもしたいな。	・一緒に遊ぶ楽しさが味わえるようにする。
	第2時	・冬休みに家族で楽しめる遊びを考え、作る。	・家でも作ってみよう。 ・家の人は楽しんでもくれるかな。	・作りたいものに机を並べるなど話しやすい場を設定する。 ・友だちのおもちゃのおもしろかったところを伝え合う場を設定する。
	第3時	・冬休みに楽しんだ遊びを紹介し合う。	・どうやってやればいいのかな。 ・教えてもらいたいな。	・得意な技を披露することで自分や友だちのよさに気付くことができるようにする。
第二 次	第1時	・地域の高齢者に伝承遊びを伝えてもらったり、一緒に遊んだりする。	・優しく教えてもらってうれしいな。 ・できるよになったよ。見せたかった。	・事前に交流のねらいについて「高齢者と打ち合わせておく」「かかわりをもつ」としている。姿を認め、価値付ける。
	第2時	・地域の高齢者との遊びを振り返り、次のめあてをもつ。	・教えたいな。 ・仲良くなれるかな。	・振り返りカードを読み合い、次の活動への思いや願いをもてるようにする。
	第3時	・園児と仲良くなる方法を考え、保育所で遊ぶ。	・まだ遊びたいな。 ・なかなか話してくれなかったな。	・保育士と交流のねらいなどに、事前に打ち合わせておく。 ・高齢者と話し合う場を設定し、活動を振り返って思いを出し合う。
	第4時	・園児に小学校のことを教えた。 ・図書室の本を見たらびっくりするかな。	・学校のことを教えた。 ・図書室の本を見たらびっくりするかな。	・振り返りカードや園児からの手紙により活動の意欲付けをする。 ・相手を意識したつぶやきを取り上げ、価値付ける。
	第5時	・小学校を案内したり、学校生活の学びを伝えてもらったりする。	・入学してから右仲間がほしいな。 ・入学してくるのが楽しみだな。	・グループで協力して活動する場を設定する。 ・グループで話し合う場を設定し、活動を振り返って思いを出し合う。
第三 次	第1時	・もっと園児と仲良くなる作戦を立てる。	・今度は学校で遊びたいな。 ・ちゃんが遊ぶものを作りたいな。	・園児のことを考えた意見を取り上げ、児童に意欲付ける。
	第2時	・おもちゃを作ったり、遊びを工夫したりする。	・君にもできるかな。 ・みんなが楽しめるにはどうしたらいいかな。	・相手を意識したつぶやきを取り上げ、価値付ける。
	第3時	・会の計画を立てる。	・早く一緒に遊びたいな。 ・楽しんでもくれるといいな。	・園児からの手紙を紹介し、意欲付ける。
第四 次	第1時	・園児と一緒に遊びを楽しむ。	・名前を覚えてくれてうれしいな。 ・あまり話さなかったな。 ・ランドセルが重たいな。 ・ランドセルが重たいな。 ・ランドセルが重たいな。	・トラブルの場面ではどうすればいいかを児童に考えさせる。よさな声かけをする。 ・グループで話し合う場を設定し、活動を振り返って思いを出し合う。
	第2時	・園児に小学校のことを教えた。 ・図書室の本を見たらびっくりするかな。	・学校のことを教えた。 ・図書室の本を見たらびっくりするかな。	・振り返りカードや園児からの手紙により活動の意欲付けをする。 ・相手を意識したつぶやきを取り上げ、価値付ける。
	第3時	・小学校を案内したり、学校生活の学びを伝えてもらったりする。	・入学してから右仲間がほしいな。 ・入学してくるのが楽しみだな。	・グループで協力して活動する場を設定する。 ・グループで話し合う場を設定し、活動を振り返って思いを出し合う。
	第4時	・園児に小学校のことを教えた。 ・図書室の本を見たらびっくりするかな。	・学校のことを教えた。 ・図書室の本を見たらびっくりするかな。	・振り返りカードや園児からの手紙により活動の意欲付けをする。 ・相手を意識したつぶやきを取り上げ、価値付ける。
	第5時	・小学校を案内したり、学校生活の学びを伝えてもらったりする。	・入学してから右仲間がほしいな。 ・入学してくるのが楽しみだな。	・グループで協力して活動する場を設定する。 ・グループで話し合う場を設定し、活動を振り返って思いを出し合う。

(注)網かけの部分は、身近な人々とかかわる部分

3 実践授業とその分析・考察

(1) 第一次「お正月が楽しみだね」

冬の遊びに着目し、一緒に遊ぶ楽しさを味わうことを通して、人とかかわる楽しさを実感できるようにクラスで遊んだり、おもちゃを製作したりした。

第1時で書いた感想には、遊びの楽しさに触れるだけでなく「教えてもらってうれしかったことや」「くんがすごくじょうずでした」など友だちに目を向けたものも見られた。実際に遊んだことで、冬の遊びや伝承遊びの興味付けになっただけでなく、教え合いなどのかかわりが生まれ、友だちのよさに気付くこともできた。

(2) 第二次「あそぼう 楽しもう なかよくなるう」

ア 第1時～第3時
伝承遊びに興味をもった児童は、授業の導入の場面で、教師がけん玉やお手玉などをするのを見て、さらに「自分もできるようになりたい」「上手になりたい」という思いをもった。そこで、「だれかに教えてもらおう」と児童に投げかけ、その対象として高齢者を位置付けた。図3に示した交流前の児童の記述より、高齢者とかかわり、「」を教えてほ

しい」という自分の願いを、一人一人がはっきりと持っていることが分かる。

こまがまわらないのでもちかたをおしえてほしい。
お手玉をつづけてやるにはどうすればいいのかおしえてほしい。
めんこであそんだことがないので、どうやってやるのかおしえてほしい。

図3 高齢者に教えてほしいこと

交流の場面では、高齢者のそばで様子をじっと見つめる児童の姿から、言葉で働きかけてはいないがかかわりたいという意欲を見取ることができた。児童は、前時に教えてほしいことを書いたことで、自分のめあてが明確になり、意欲をもつことができたと思われる。

図4にこの時間の振り返りカードの記述の一部を示す。

M先生（高齢者）がおてだまをおしえてくれました。できるようになってうれしかったです。
めんこめいじんに、あいてのめんこをおとすわざをおしえてもらったよ。うれしかったな。
あやとりのほうきができるようになったよ。すごかったよ。また、おうちにかえってやってみるよ。

図4 振り返りカードの記述の一部

観察による見取りでは、児童は初対面の高齢者に対して緊張しており、自分から働きかけにくい様子が見られたが、振り返りカードの記述からは、児童は教えてもらったうれしさやできるようになった喜びを感じていることが分かる。また、「また、おうちにかえってやってみるよ」の記述からは、高齢者とかがわったことで、児童の遊びが広がっていることも分かる。

このことから、児童は受け身的ではあったが、高齢者の優しさに触れ、人とかがわるよさを感じることができたと言える。しかしながら、自分から積極的に働きかけるという点においては課題が残った。

イ 第4時～第5時

前時の課題を受け、児童の積極的な働きかけを促し、かかわりを深め広げようとする対象として年下の園児を取り上げた。交流をすすめるに当たっては、保育士との連携が重要だと考え、事前に次のことを打ち合わせた。

交流前にお互いのねらいや活動の流れなどを確認し合い、共通理解を図ること。
交流後に打ち合わせを行い、お互いの気付きを出し合うこと。

し合うこと。
相手に意識しやすく、かかわりがより深まるようにグループを10作り、同じグループで3回の交流を行うこと。
交流への意欲付けを図る工夫として、手紙などのやりとりをすること。

園児との1回目の交流は、保育所で既製のおもちゃ（こま、けん玉、カルタ、ブロック、絵本など）を使って、室内遊びを行うこととした。児童は交流の前日に手紙とカセットテープをC保育所に届けるなど活動に意欲を見せ、園児との交流を心待ちにしている様子が見られた。

児童は保育所での遊びを楽しむことができた。特にカルタなど輪になってみんなで遊ぶことができるものを選んだグループは最後まで一緒に活動することができ、会話がはずむなどかかわりが深まっている様子が見られた。反面、初めのうちは園児を気遣いみんなで活動していたが、時間が経つにつれて一緒に活動できていないグループも見られた。その原因として、自分の遊びに熱中してしまったこと、園児に話しかけても答えてくれないことなど、どのようにかかわればよいのか分からなかったことが考えられる。

図5にこの時間の振り返りカードの記述の一部を示す。

ほいくえんのみんなどあそんですごかったよ。
ほいくえんのおともだちにあえてうれしかったよ。
Aちゃんがこまをまわせたよ。すごいな。
なにであそぶっていったら、だまっていたよ。
みんながまいごになって、ちがうあそびだったよ。
あんまりはなしてないから、いつかいっぱいほしたいよ。

図5 振り返りカードの記述の一部

観察による見取りでは、児童からの働きかけが少なく、かかわろうとする意欲があまり見られなかったと思われたが、振り返りカードの「ほいくえんのおともだちにあえてうれしかったよ」「Aちゃんがこまをまわせたよすごいな」などという記述からは、園児に対する関心の高さを読み取ることができた。しかし同時に「みんながまいごになって、ちがうあそびだった」「なにであそぶっていったら、だまっていた」「あんまりはなしてない」などの記述から、児童のうまくかかわることができなかったという思いも見られた。そこで、これを第三次の課題として提示することとした。

(3) 第三次「なかよし大きくせんをかながえよう」
 振り返りカードを読み合い、1回目の交流について活動を振り返る場を設定した。児童は図6のように自分なりに課題を意識し、その解決方法を考えた。

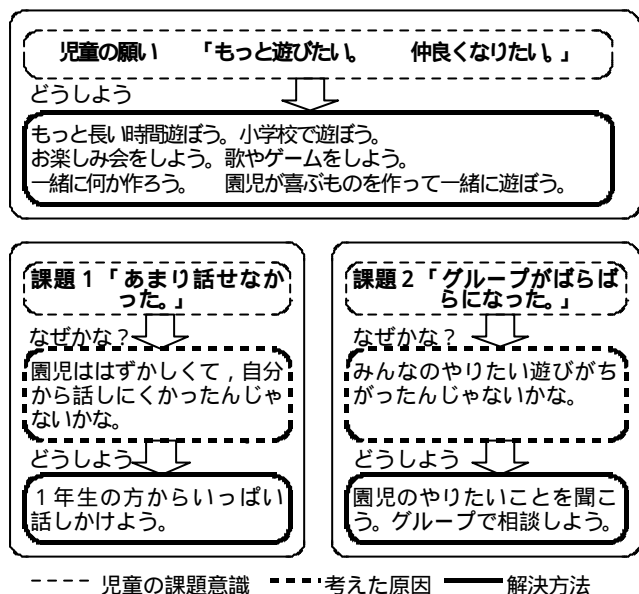


図6 児童の課題とその解決方法

解決方法を考えるに当たって、児童は第二次での自分と高齢者とのかかわりを振り返り、優しく話しかけてもらったことなどを参考にしたと思われる。

また、話し合いの中で児童は、自分たちの「もっと仲良くなりたい」「もう一度かかわりたい」という願いや意欲を確認し合い、園児と小学校の体育館で手作りおもちゃで遊ぶことに決めた。

おもちゃの製作では、2年生のおもちゃ大会に招待された時のことなど既存の体験を生かしながら、夢中になって製作する児童の姿が見られ、園児と楽しく遊びたいという活動への意欲がうかがえた。

また、表2に示した「グループの計画」の記述からも園児への思いやかかわろうとする意欲を読み取ることができる。

表2 グループの計画の一部

グループ	作るもの	「ばっちりやるやるニュース」の記述
にわとり	まとあて	Dくみさんとなかよくなって、いっぱいてんをいれてかたいな。 Dくみさんには、たまをおおくするよ。
たぬき	ビー玉ころがし	いっしょにころがしてあげるよ。 わからないときはおしえてあげるよ。
ライオン	ボウリング	ともだちになれるようがんばるぞ。 ほいくえんのおともだちにはピンをちかくにするよ。 やさしくするよ。

(4) 第四次「なかよし大きくせん」

ア 第1時～第3時

保育所から手紙が届けられ、園児の「また遊びたい」という願いを知ることによって、児童は2回目の交流への意欲をさらに高めた。この場面では直接会ってはいないが、園児のことを意識しながら会の計画を立てている様子が見えられた。

前時の活動で、自分なりに課題を意識していた児童は、「遊びのやり方が分からないかもしれない」など園児が困ることを考えることで、さらにかかわり方について見直すことができた。また、児童の課題(図6)を受けて、2回目の交流の活動内容に、感想を出し合う場(課題1)とグループでの活動を意識できる活動(課題2)を設定することにした。

2回目の交流では、1回目の交流に比べて、児童が園児を名前と呼ぶ姿や、園児の気持ちをくみ取りながらグループで行動する姿が多く見られた。また、園児に対する言葉での働きかけが増え、児童が課題を意識し、話しかけることでかかわりを深めようとしていることがうかがえた。また、活動の終わりに、「Bちゃんが、ボウリングが楽しかったって言ってたよ」と園児の思いを発表する児童もあり、自分の思いだけでなく他者の思いにも目を向けることができるようになった様子を見取ることができた。

図7にこの時間の振り返りカードの記述の一部を示す。

ついにほいくえんさんとともだちになれました。名まえやおをほえるとすぐともだちになれるんだね。
 Cちゃんと手をつないでうれしかったよ。
 Eちゃんがビー玉ころがしがおもしろいって言ってうれしかった。
 わらってくれたよ。うれしかった。
 FくんとGくんがいきいばしょをいってくれたからにっこり。
 じぶんがいっぱいはこんだよ。とてもじぶんにはくしゅをしたかったよ。
 Dくみさんにずっときめられた。どうしよう。
 Hくんがうるちよろしてこまったよ。

図7 振り返りカードの記述の一部

1回目の交流後の振り返りカードには、「ほいくえんさん」という書き方が多かったが、2回目は園児の名前がたくさん見られた。また、記述の内容が遊びそのものの楽しさやうれしさから、園児とかかわることの楽しさやうれしさに変ってきていることが分かった。「ついにともだちになれた」「Cちゃんと手をつないでうれしかった」などの記述より、

児童は2回目の交流で園児と仲良くなったと実感していると思われる。また、「わらってくれた」「おもしろいって言ってくれた」など園児からの働き返しがあつたことを喜んで記述も見られ、児童は、自分の働きかけに対して園児からの働き返しがあつたことを喜び、双方向のやりとりがうまくいったことで、お互いのかかわりが深まったと感じていると考えられる。さらに、「じぶんにはくしゅをしたかった」との記述から、園児とかかわり、がんばっている自分のよさにも気付いていることが分かる。今後、その気付きが児童の自分に対する自信を生み出すことにつながるとと思われる。

また、園児とのかかわりの深まりを喜んでいる児童だけでなく、「園児が勝手に遊びに行つて困つた」「まいごになつた」「園児ばかり決めた」などの思いをもつ児童もおり、新たな課題もうかがえた。これは、園児とのかかわりが深まってきたからこそ浮かび上がった課題だと思われる。これらのことから、かかわりを繰り返すことの大切さを再認識した。

イ 第4時～第5時

児童は、前時の活動を通して、園児とかかわる楽しさとかかわりの深まりを感じ、「もっともっと一緒に遊びたい」という意欲をもつた。そこへ保育所から「また小学校に行つて、体育館だけでなくほかの教室も見てみたい」という手紙が届けられ、園児の新たな願いを知つた。そのことでさらに3回目の交流への意欲を高めた。児童は、園児の思いと前時の自分たちの課題を図8のように受け止めて、グループごとに学校を案内する計画を立てた。

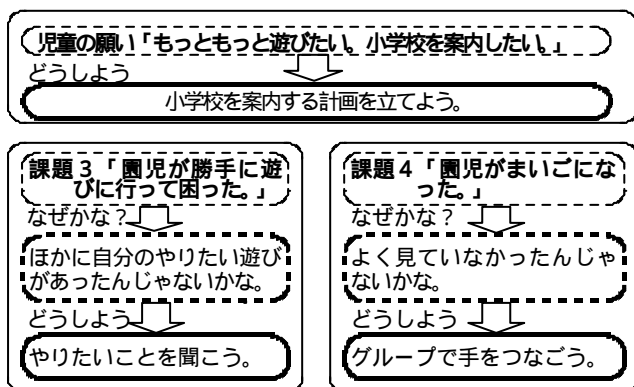


図8 児童の課題とその解決方法

3回目の交流では、グループで一緒に行動するこ

とができた。「どこに行きたい」と園児の思いをたずねたり、「図書室には本がいっぱいあるんだよ」などと説明したりしながら案内する様子から、自分たちがリードするという意識の強さを見取ることができた。2回目の交流に比べて、言葉による働きかけのほかに、背中に手を添えるなど体に触れる行為が頻繁に見られ、園児へのかかわり方の変化も見取ることができた。また、名前で呼び合つたり、園児を自分の膝の上に座らせたりする姿も見られ、かかわりがお互いに構えることなく自然になってきた様子もうかがえた。

図9にこの時間の振り返りカードの記述の一部を示す。

きょうIちゃんが「Jちゃんおいで」って名まえでよんでくれたのがうれしかったよ。またあそびたいです。
なかよくなれたよ。はなしができるようになってよかったよ。
こんどは2年生とやりたいな。2年生がおわつたら、6年生とやりたいな。

図9 振り返りカードの記述の一部

園児だけでなくほかの学年とも仲良くなりたいという記述が増えたことは、児童がかかわりを広げようとしているととらえることができる。つまり、児童が3回の交流を通して、園児としっかりかかわり、その楽しさを実感することで、かかわりを深め広げようとする意欲を高め、新たな対象を求めるようになったと考えることができると思われる。

研究のまとめ

本研究を通して、次のことが明らかになった。

学習指導計画に繰り返しかかわる場を設定することは、児童のかかわりを深め広げようとする意欲を育てるうえで効果がある。

活動を振り返り、課題解決の方法を考える場や手紙などを通して相手の思いや願いを知る場など、交流の場面と次の交流の場面をつなぐ活動を設定することが、児童のかかわりを深め広げようとする意欲を育てるうえで重要である。

今後、年間計画に多様な人々とかかわりを組み入れた実践をどのように位置付けていくかをさらに研究していきたいと思う。